

南島中部圏先史時代遺跡出土の植物遺体

高宮広土
札幌大学

TAKAMIYA Hiroto
Sapporo University

はじめに

先史時代における植物利用を考察する際、琉球列島の島々は大変魅力的なテーマを提供する。まず、「中の文化」から注目されるテーマは柳田國男（1961）の「海上の道」仮説、佐藤洋一郎（1992）の「新・海上の道」仮説、あるいは佐々木高明（2003）の「海上の道」仮説であろう。イネ等の栽培植物はさらに南方から琉球列島を経て「中の文化」にもたらされたのであろうか。著名な研究者によって提唱されたこれらの仮説は、考古学や植物学等の日本列島における稲作あるいは農耕の始まりに関する研究分野に多大な影響を与えてきており、そのため検証する価値は十分以上にある。

一方、ローカルなレベルでも興味深いテーマが山積している。先史時代をとおして九州島に大きな影響を与えられたという南島北部圏であるが、はたして九州島のように弥生時代になると普遍的にイネ等が栽培されたのであろうか。あるいは、九州（南九州）より農耕への変遷のタイミングが遅かったのであろうか。また、南部圏では南から植民したと考えられる下田原期や無土器期の文化が存在したが、彼らは野生植物のみで生存することを試みたのであろうか。一体どのような野生植物を利用していたのであろうか。さらに、グスク時代になって中部圏と南部圏が初めて一つの文化圏に統合されるが、中部圏的な農耕はいつごろ南部圏に導入されたのであろうか。これらのテーマは非常に興味深いテーマであるが、これらの問いに対する答えは推測の域を出ない。北・南部圏においてはハード・データがほとんど存在しないからだ。

中部圏においても約20年前までは、先史時代における植物食利用に関しては北部圏や南部圏と同様な状況であった。その顕著な例がこの地域における農耕のはじまりというテーマについてである。上記した3仮説を含めて、1990年代までには主に沖縄諸島に焦点をあて、この地域における農耕のはじまりに関する仮説が少なくとも7仮説提唱されていた（高宮 2007）。この点は「活発に議論されている」と評価できるかもしれないが、裏を返せば十分なデータが存在していなかったとも解釈できる。そのため状況証拠等によってこれらの仮説が提唱されたといっても良いのかもしれない。ここ20年程、中部圏においてはフローテーション法の導入および低湿地遺跡における発掘調査によって、先史時代における植物食利用がかなり明らかになってきた。

「沖縄では植物遺体は出にくい（知念 1991私信による）」といわれたことがあった。実際沖縄（および他の琉球列島の島じま）では植物遺体を検出することが難しいことを痛感している。しかし、それでもフローテーションが導入された1991年以前と比較すると、この研究分野は十分に進展してきたと思われる。そこで、本報告では、ここ20年間に於けるデータの蓄積を紹介する前に、まずバックグラウンドとして、1992年以前に理解されていた先史時代における植物食利用について簡単にまとめてみる。次に、ナガラバル東貝塚の属する貝塚時代後期における植物食利用について再考し、最後に貝塚時代中～早期の植物食利用について述べる。

1. バックグラウンド

先史時代の人びとの食性に関するテーマは古今東西、考古学者や関連分野の研究者が注目するテ

マである。それはただ単に先史時代の人が何が何を食していたかを解明するのみではなく、究極的には彼らの環境への適応プロセスを理解する糸口を導き出すことが可能となるからである。他地域の研究者と同様に、琉球列島の先史時代を研究対象とする研究者も過去における食性の復元を古くから試みている。幸いなことに南島中部圏先史時代に属する遺跡からは多量の脊椎動物遺体や貝類遺体が出土することから、脊椎動物や貝類は沖縄考古学の黎明期からその研究の対象となっていた。たとえば、1908年に発見され、1919年に発掘調査が実施された萩堂貝塚の発掘調査報告書には既に動物の遺骸（松村瞭 1982：復刻版）についての記述がある。大山柏（1982：復刻版）も伊波貝塚発掘報告において動物遺体について報告している。今日までに刊行された報告書を見ると多くの報告書において自然遺物に関するレポートが含まれているが、そのほとんどが貝類や脊椎動物に関する分類および考察である。先史時代にはイノシシやサンゴ礁棲息の魚類や貝類を利用し、グスク時代になるとウシやウマ等の家畜動物が利用されていた傾向がみえてきた。この傾向は、90年代になると樋泉（2011など）や黒住（2011など）の研究によってさらに支持されている。樋泉（2011など）や黒住（2011など）による一連の研究は琉球列島における動物利用に関して新たな知見をも提供している。

他方、先史時代における植物食利用に関しては過去におけるその重要性から、多和田（1975）や Pearson（1981）らが食用可能となる植物種をリストアップしていた。しかし、貝類を含めた動物遺体と比較して、発掘調査時に肉眼で認識することが困難なことから、植物遺体が発出され、これらのデータが発掘報告書に記載されることは少なかった。渡辺（1991）は1991年以前に植物遺体が発出された先史時代の遺跡をまとめたが（表1）、このころまでに検出・同定・報告された動物遺体と比較すると、植物遺体はほとんど検出されていなかったと言っても過言ではない。

表1によると8遺跡中4遺跡よりシイ属、3遺跡よりタブノキ、各1遺跡よりクスノキ科、スダジイ？、マメ科、シュロウクサギ、ツバキ、およびノブドウが発出されている。ただし、数量的な記載がなく、1991年までの報告では先史時代における植物食利用は十分に把握できない。また、渡辺（1991）も述べているようにナガラ原東貝塚が属する貝塚時代後期に関しては2遺跡のみから植物遺体知られていた。渡喜仁浜原遺跡で確認されたスダジイおよび低湿地遺跡である前原貝塚出土のオキナワウラジロガシである。これらのデータ（表1）は、先史時代の植物食利用は野生種のものであったこと示唆するものであった。

2. フローテーション法の導入

2.1. 貝塚時代後期（弥生～平安並行期相当）

上述したように貝塚時代後期の遺跡では宜野座村に所在する前原貝塚からオキナワウラジロガシお

表1 1991年以前に先史時代遺跡より回収された植物遺体（渡辺 1991）

遺跡名	帰属時期	報告された植物遺体
屋比久原遺跡（本部町）	貝塚時代前期	オキナワジイ
古我知原貝塚（石川市：現うるま市）	貝塚時代前期	タブノキ
西長浜原遺（今帰仁村）	貝塚時代中期	オキナワジイ
苦増原遺跡（具志川市：現うるま市）	貝塚時代中期	クスノキ科、コナラ属、スダジイ？ マメ科、シュロウクサギ
ヌバタキ遺跡（宜野湾市）	貝塚時代中期	オキナワジイ、タブノキ、ツバキ、ノブドウ
高嶺遺跡（与那城町：現うるま市）	貝塚時代中期	タブノキ
前原貝塚（宜野座村）	貝塚時代後期前半	オキナワウラジロガシ
渡喜仁原遺跡（今帰仁村）	貝塚時代後期前半	スダジイ、マメ科

よび渡喜仁浜原遺跡よりイタジイが報告されていた。しかし、この時期に関しては、「弥生～並行期前半農耕説」が提唱されており、実際沖縄諸島の弥生時代相当期に入びとは「貝の道」と呼ばれる長距離交易をとおして、イネやその他の栽培植物の存在を知っていた可能性が高いと思われる。水田稲作という生業は存在したのであろうか。

1992年読谷村に所在する高知口原貝塚において、本格的なフローテーションが導入された。高知口原貝塚は貝塚時代後期前半（3～5世紀：炭素14年代 $1610 \pm 50BP < AD 430 >$; $1770 \pm 70BP < AD 250 \sim 315 >$ ）の遺跡である。計約2500lの土壌サンプルを回収した。回収された土壌サンプルをフローテーション処理した結果、イタジイ、堅果類子葉、堅果皮、タブノキ、堅果類/タブノキ子葉等が同定された（高宮 2002）。同年の後半には、那覇市に所在する那崎原遺跡（貝塚時代後期後半 9～10世紀）においてフローテーションを実施した。計約1600lの土壌をサンプリングした。那崎原遺跡からは鋤跡（250基以上）や溝跡（2条）など農耕に関連したと解釈された遺構が検出されている。回収された植物遺体の分析はこの解釈を支持するものであった。すなわち、イネ、オオムギ、コムギ、およびアワ等の栽培植物が検出され、さらにこれらの栽培植物に加えて、タデ科、コミカンソウ属、カヤツリグサ科、およびカタバミ科等の種子が含まれていた。残念ながら、那崎原遺跡出土の栽培植物自体の炭素十四年代測定は実施されていないが、これらのデータがコンタミネーションでなかったとすると、少なくとも農耕を行っていた人びとがこの頃存在したことになる。1992年に得られた植物遺体から、高知口原貝塚と那崎原遺跡の間の時期に狩猟採集から農耕への変遷があったことが示唆された。

1997年～2002年および2010年に熊本大学考古学研究室による用見崎遺跡（奄美大島旧笠利町）、ナガラ原東貝塚（沖縄県伊江村）、2004年のマツノト遺跡（奄美大島旧笠利町）および2003年の安良川遺跡（奄美大島旧笠利町）の発掘調査に参加させていただき、植物遺体の回収と分析を試みる機会があった。用見崎遺跡（表2）では、土壌をコラム・サンプリングした。回収された土壌サンプルは計

表2 用見崎遺跡出土の植物遺体

サンプル	土壌サンプル量 (l)	浮遊物 (量)	ブナ科 (片)	タブノキ (片)	不明 (片)	同定不可能 (片)	計 (片)
コラム 1～39 深さ(0～150cm)	54	69.14	2	1	1	13	17

表3 安良川遺跡出土の植物遺体

サンプル	サンプル量 (l)	浮遊物 (g)	堅果類/タブノキ子葉? (片)	堅果皮? (片)	同定不可能 (片)	計 (片)
ウニ溜まり土坑	158.5	109.61	11	19	60	90
D1・E1間 (コラム: 0～16cm)	16	26.81	4	1	19	24
A-1サンプル (上・下部)	129.5	233.26	22	27	46	95
A-3 (III区)	38	48.66	20	7	34	61
コラムサンプル (A-1壁面)	423	581.26	12	4	32	48
計	765	999.6	69	58	191	318

表4 マツノト遺跡出土の植物遺体

サンプル	土壌サンプル量 (l)	浮遊物 (g)	同定不可能 (片)	計 (片)	
MTR (Mトレンチ) コラム	I-1～11	77.5	541.36	6	6
ピット内		13.5	10.26		
北側崖面区 コラム	III～1～17	106	69.15	16	16
北側崖面区西側 コラム	I～(IIIf)	14.5	18.8	2	2
南側断面区東側 コラム	表土～VII3	116.5	98.1	1	1
		328	737.67	25	25

表5 ナガラ原東貝塚出土の植物遺体

年度	サンプリング地点	区	層位	サンプル量 (l)	浮遊物 (g)	オヒシバ (粒)	タブノキ (片)	堅果類子葉 (片)	堅果類/タブノキ子葉 (片)	ブドウ属 (粒)	オトギリソウ属 (粒)	不明 (片)	固定不可能 (片)	計 (粒/片)	
1999年度	コラム No.3		(Ⅲ～Ⅵ層)	24	13.99									15	15
	北1西1		Ⅲ	48	28.35							1		9	10
2000年度	北1西1	Ⅳ	Ⅳ	520	329.81		6	1	11					68	86
	北2西1	Ⅲ	Ⅳ	50	36.2				1					2	4
	北3西1	Ⅲ	Ⅳ	56.5	46.24							1		9	9
	北3西1	Ⅳ	Ⅳ	310	291.5							1		64	65
2001年度	北2東1	Ⅰ	Ⅳ	100.5	79.2									27	27
		Ⅱ	Ⅳ	129.5	78.31									29	29
		Ⅲ		235	114.49		1							63	64
		Ⅳ		113.5	45.38									17	17
	北3西1			11.5	5.03									4	4
2002年度	北2西1	Ⅰ	Ⅳ(下部)	75.5	33.83									6	6
	北2西1	Ⅱ		95.5	52.64									5	5
	北2西1	Ⅲ		115	56.43					1				4	5
	北2西1	Ⅳ		114	81.1									16	16
	北2東1	Ⅰ		69	50.38									8	8
	北2東1	Ⅱ		53.5	30.62									4	4
	北2東1	Ⅲ		76	47.85									8	8
	北2東1	Ⅳ		58	30.69									6	6
	第2東トレンチ	A地点		38.5	25.95										0
	第2東トレンチ	B地点		28	12.73									10	10
	北2西1			5	3.79										0
	北2東1			5	2.03										0
	北2東1			3	8.71										0
2003年度	北1西1	Ⅰ	Ⅳ(下部)～Ⅴ	83	45.12		1						1	1	3
		Ⅱ		53.5	37.13									3	3
		Ⅲ		209.5	112.19		1							8	9
		Ⅳ		249.5	156.65								1	15	16
		黒色度部分	Ⅳ(下部)	9	3.25									1	1
		黒色度部分	Ⅳ(下部)	17	3.85									3	3
2010年度	北1西1	Ⅱ	Ⅴ	75	35	1								1	2
		Ⅳ	Ⅴ	109.5	77.48									1	1
				3140.5	1939.72	1	9	1	12	1	2	3	407	436	

54であったが、堅果類子葉、堅果皮、およびタブノキが回収された。安良川遺跡では計765lの土壌をウニ溜まり等から回収した。この遺跡からは、堅果類/タブノキ子葉(?)および堅果皮(?)が含まれていた(表3)。マツノト遺跡では、計328の土壌をサンプリングしたが、得られた植物遺体は同定不可能な破片のみであった(表4)。

上記期間の熊本大学考古学研究室による発掘調査で最も集中的に発掘が実施された遺跡がナガラ原東貝塚であった。ナガラ原東貝塚における発掘調査では6次にわたり発掘調査に参加する機会を与えられた。表5は発掘調査において回収された植物遺体をまとめたものである。計3100l以上の土壌サンプルが分析の対象となった。

まず、ここで述べなければならないことはこの表5には含まれていないイネについてである。ナガラ原東貝塚では発掘調査の初年度からイネが検出され、第1次～第5次において最も多く同定された植物遺体であった。しかしながら、2002年にイネ自体を炭素十四年代によって年代を測定したところ「現代」という結果が得られた。どうやらイネはコンタミネーションによるものであることが明らかとなった(木下 2006)。ナガラ原東貝塚ではイネに加えてコムギも回収されていた(高宮 2002: 図1)。このコムギの年代測定結果を表に記す(表6ab)。

この結果、コムギも貝塚時代まで遡らないことが判明した。ただ1粒のコムギであるが、このコムギが最近のコムギを代表するものであるとすると、小型(長さ×幅×厚さ:3.4×1.9×2.1mm)に属し、グスク時代からこのころまで沖縄諸島(少なくとも伊江島)では小型のコムギが栽培されていた事を示唆しており、興味深い結果であると思われる。グスク時代のコムギが最近まで食されていたのだろうか。

イネやコムギ自体の炭素十四年代測定の結果、ナガラ原東貝塚の時期には確実な栽培植物が存在しなかったことになる。ナガラ原東貝塚ではイネやコムギを除くとその他の植物遺体はタブノキ子葉や堅果類子葉等であった。ナガラ原東貝塚、安良川遺跡、マツノト遺跡および用見崎遺跡出土の植物遺体分析により高知口原貝塚と那崎原遺跡の間の時代はおそらく野生の植物が生業の中心であったであろう。また、高知口原貝塚や後述する住吉貝塚では他地域(例えば北海道縄文 Crawford 1983)と比較して、回収された炭化種子の量がかなり少なかった。しかし、熊本大学によって発掘調査された4遺跡は高知口原貝塚や住吉貝塚と比較してもさらに少ない。特に、ナガラ原東遺跡における土壌サンプル量を考慮すると、検出された植物遺体は予想外に少ないという印象がある。この点は、ひょっとしたらナガラ原東貝塚は季節的に利用された遺跡であったことを示唆するものかもしれない。あるいは、高知口原貝塚や住吉貝塚と比較して、ナガラ原東貝塚を利用した人の数が少なかったのかもしれない。同様なことが他の3遺跡(と同時期の遺跡)にも当てはまる可能性はないのであろうか。

以上、貝塚時代後期の植物食利用について述べた。では貝塚時代中期～早期の植物食利用はどのようなものであったであろうか。フローテーションの導入に加えて、2000年前後における低湿地遺跡に発掘調査により貝塚時代中期から早期における植物食利用がかなり明らかになっている。



図1 ナガラ原東貝塚出土のコムギ

表6a ナガラ原東貝塚出土コムギの炭素十四年代測定結果（放射性炭素年代測定結果）

試料名		地区・層位	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	測定機関番号
試料番号1	穀類13 (ナ-コムギ)	N2E1・Gr4区南東2	炭化種子	150±30	-21.59±0.41	100±20	IAAA-102673

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。ナ：ナガラバル貝塚
- 2) BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 δ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表6b ナガラ原東貝塚出土コムギの炭素十四年代測定結果（暦年較正結果）

試料名		補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.	
試料番号1	穀類13 (ナ-コムギ)	152±25	σ	cal AD 1,670 - cal AD 1,693	cal BP 280 - 257	0.190	IAAA-102673	
				cal AD 1,727 - cal AD 1,779	cal BP 223 - 171			0.476
				cal AD 1,799 - cal AD 1,812	cal BP 151 - 138			0.119
				cal AD 1,919 - cal AD 1,943	cal BP 31 - 7			0.213
				cal AD 1,950 - cal AD 1,952	cal BP 0 - 2			0.002
			2σ	cal AD 1,667 - cal AD 1,706	cal BP 283 - 244	0.169		
				cal AD 1,720 - cal AD 1,783	cal BP 230 - 167	0.367		
				cal AD 1,796 - cal AD 1,819	cal BP 154 - 131	0.110		
				cal AD 1,823 - cal AD 1,825	cal BP 127 - 125	0.003		
				cal AD 1,832 - cal AD 1,883	cal BP 118 - 67	0.155		
				cal AD 1,914 - cal AD 1,953	cal BP 36 - 3	0.196		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright1986-2010 M Stuive and PJ Reimer)
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対比に示したものである。

2.2. 貝塚時早期～中期：フローテーション+低湿地遺跡

2.2.1. 貝塚時代中期 住吉貝塚（縄文時代晩期相当）

住吉貝塚は沖永良部知名町に所在する遺跡である。2001～2004年度の発掘調査により14基以上の住居跡が確認された。これらの住居跡のうち、4号住居跡（土壌サンプル計247l）、5号住居跡（同計293l）、8号住居（同計54l）、11号住居跡（同計658l）および12号住居跡（同計473l）から1725lの土壌をサンプリングし、フローテーション処理を実施した。回収された浮遊物に含まれていた植物遺体は、以下の通りであった。イタジイ1点、タブノキ1片、シマサルナシ19粒、堅果類子葉12片、堅果類子葉(?)10片、タブノキ子葉(?)9片、堅果類/タブノキ子葉22片、堅果皮(?)237片、不明16片、および同定不可800片（高宮 2006a）。また同時期の西長浜原遺跡ではイタジイが報告されていたが（渡辺 1991）、最近の再分析により西長浜原遺跡の27B号住居跡から完形2、半形108、破片725のイタジイが確認されている（株式会社古環境研究所 2006）。徳之島に所在する中里遺跡からも堅果類が検出されている（高宮 2010）。

2.2.2 貝塚時代前期 前原遺跡（縄文時代後期相当）

前原遺跡は沖縄本島宜野座村に所在する低湿地の遺跡である。回収された木炭等の炭素十四年代は930-1310 cal BC (IX-2層) および1940-2300 cal BC (IX-3層) であった（辻 1999）。高宮（1999）は「水溜め遺構 (IX層)」の土壌サンプル計136lを分析の対象とした。その結果、少なくとも30分群に属する植物遺体を確認した。低湿地の遺跡であったので、ほとんどの植物遺体は未炭化であった。炭化した植物遺体には、タブノキ子葉、イタジイ子葉、ナシカズラ、およびヤンバルアカメガシワ等

であった。

この遺跡からは計23基の貯蔵穴が検出され、そのうち10基はパーキ（竹製籠）を伴っていた。これらの貯蔵穴からは発掘調査時から木の実等が確認され、パーキを含む貯蔵穴や敷石遺構の植物遺体分析が大松・辻（1999）によってなされた。分析の結果、オキナワウラジロガシ果実、シイノキ属果実、マテバシイ属果実等の堅果類やシマサルナシ等が報告されている。まとめとして、大松・辻（1999：234）は「貯蔵穴を主とした遺構からはいずれもオキナワウラジロガシが多産し、遺構によっては大量の果実が得られた。（中略）オキナワウラジロガシの果実のみが利用対象であったと見なせる」と記している。同時期の神野貝塚（沖之永部島：知名町）でも貯蔵穴が確認され、そこからタブノキ子葉が多量に検出されている（上村 1984）。

2.2.3. 貝塚時代前期 伊礼原遺跡（縄文時代前期相当）

伊礼原遺跡は沖縄本島北谷町に所在する遺跡で同町字伊礼原遺跡144番地を中心とする低湿地区と同163番地を中心とする砂丘区から成り立っている。その総面積は約15,000㎡という広大な遺跡である。確認された植物遺体の分析は、辻・大松・辻（2007）によって行われた。レポートによると分析となったサンプリング地点は、低湿地区の「試掘穴 No.143」、「どんぐり塚」と呼ばれるブナ科果実の破片等からなる植物塚および「パーキ内ドングリ」からであった。

「どんぐり塚」と呼ばれるように、多量のドングリ類が確認されたが、それらはシイ属、ウラジロガシ、およびオキナワウラジロガシが主であった。また、パーキ内から得られた植物遺体はオキナワウラジロガシであった。試掘穴 No.143では50種以上の植物遺体が報告されている。報告者によるとそのうち「どんぐり塚」を構成していたシイ属果実がきわめて多量に含まれていたこと、シイ属以外のオキナワウラジロガシやウラジロガシ、ウバメガシ、マテバシイ属とブナ科植物群の果実遺体が多産したところに試掘穴 No.143の特徴がある。なお、「どんぐり塚」より得られたシイ属果実の炭素十四年代は3915-3880 cal BC (1 σ) および3975-3925 cal BC (1 σ) であった。他の試料の年代も4000 cal BC であった。

2.2.4. 貝塚時代早期 新城下原第二遺跡（縄文時代早期相当期）

新城下原第二遺跡は主に宜野湾市字安仁屋前原544番地に分布するが、一部は隣町の北谷町まで広がっている。約総面積2,760㎡が発掘調査の対象となった。この遺跡も低湿地遺跡である。第IX層から爪形文土器や無文土器が確認され、IXb層より検出されたイノシシの炭素十四年代は4910-5050 cal BP（パリノ・サーベイ株式会社 2006）であった。VIII層、IX層、XII層、XIII層およびXIV層より回収された植物遺体を分析した結果、30分類群以上の植物遺体が確認された。上記した遺跡より出土し、先史時代において重要と考えられる堅果類は含まれていなかった。ただし、検出された植物遺体はヤマモモなど全て野生に属するものであった（高宮 2006b）。

3. 考察と結論

1991年以前には計8遺跡から植物遺体が報告されていた（渡辺1991）。そのうち貝塚時代後期は2遺跡であった。熊本大学考古学研究室による貝塚時代後期遺跡（ナガラ原東貝塚、安良川遺跡、マツノト遺跡、用見崎遺跡）、読谷村教育委員会による高知口原貝塚および那覇市教育委員会による那崎原遺跡の発掘調査におけるフローテーションの導入により、那崎原遺跡の時期である9～10世紀以外の貝塚時代後期の植物にかかわる主な生業は野生植物の利用であったことがほぼ明らかになったと思われる。また、フローテーションの導入に加えて、この10年程の低湿地遺跡における発掘調査は、貝塚時代早期から中期にかけての植物利用も主に野生植物の採集であったことを示唆するものであった。

第Ⅱ部

中部圏ではイタジイやオキナワウラジログシなど6種類の堅果類が知られているが(初島 1971)、アマミアラカシを除く5種類が先史時代の遺跡から確認されたことになる。多和田(1975)はこれら6種類の堅果類とソテツを先史時代の主食源と予測したが、伊礼原遺跡(辻・大松・辻 2007)からは、ソテツも報告されている。

これらの堅果類(特にイタジイとオキナワウラジログシ)に加えて、コンスタントに出土するのがタブノキである。それゆえ、先史時代人にとっては意義のある植物であったと思われる。しかし、渡辺(1991)はタブノキについて以下のように述べている。「タブノキは本州以南の暖帯に分布し、実は6~7月に熟す。外側の果肉は甘酸っぱい。もしこれだけを食べるのであれば、土中に貯蔵することは意味のないことである。ことによると、今日には伝えられていない食用化の方法があるのかもしれない。ただし、嗜好品的であり、主食的なものではない。」同様な意見を他の研究者からも伝えられたことがある(細谷 2007 私信)。興味深いことに、沖縄諸島先史時代における主食源をリストアップした多和田(1975)にはタブノキは掲載されていない。つまり、多和田(1975)のような博学的な研究者でさえタブノキを食料としてとらえられていないことになる。先史時代の遺跡からコンスタントに出土するタブノキは食料ではなかったのであろうか。あるいは渡辺が述べているように(渡辺 1991)、先史時代の人びとは今日では忘れられた方法でタブノキを食用としていたのであろうか。

この20年の研究により遺物として残りうる主な植物資源はある程度検出されたのではないであろうか。これらの植物食とサンゴ礁資源を中心とする動物食利用でヒトは生存することは可能であったのであろうか。やはり多和田(1975)やPearson(1981)あるいは多くの研究者が推測しているように、根茎類も利用されていたことであろう。今後の研究の方向性として、フローテーションなどに加えて、石器の澱粉粒の分析も実施する必要がある。また、上述したように那崎原遺跡より前の時代は主に野生の植物を利用していたであろう。ただし、黒住(2011)や伊藤(2011)は先史時代における農耕の存在を指摘している。おそらく、栽培植物が主食となったというレベルの「農耕」ではなく、先史時代人のダイエツトに占める割合は少ないが、多少なりとも彼らは彼らを取り巻く環境に影響を与え、彼らに取って都合の良い植物をより選択的に利用あるいは育てたというレベルの「農耕」であろう。この2仮説も念頭に置いて今後の研究を実施することが望ましい。

本研究の研究分担者および研究協力者の方々には多くの有益なアドバイスを頂きました。また、読谷村歴史民俗資料館仲宗根求氏にはデータの収集で大変お世話になりました。以上の方々はこの場をお借りして心より感謝申し上げます。本研究の一部は文科省科研費(課題番号21101005)の助成を受けておこなわれた。

参考文献

- 伊藤慎二 2011 「先史琉球社会の段階的展開とその要因-貝塚時代前I期仮説」『先史・原史時代の琉球列島〜ヒトと景観』高宮広土・伊藤慎二(編) pp.43-60. 六一書房:東京
- 大松しのぶ・辻誠一郎 1999 「前原遺跡から産出した大型植物遺体」『前原遺跡』宜野座村教育委員会(編) pp.223-241. 宜野座村教育委員会:宜野座村
- 大山柏 1982 『琉球伊波貝塚発掘報告(復刻日本考古学文献集成)』第一書房:東京
- 上村俊雄 1984 『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基础研究』鹿児島大学法文学部考古学研究室:鹿児島市
- 株式会社古環境研究所 2006 「西長浜原遺跡出土炭化物の放射性年代測定及び種実・材質同定」『西長浜原遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター(編) pp.221-228. 沖縄県立埋蔵文化財センター:西原町

- 木下尚子 2006 「遺物包含層における現代イネ混入の検討(抄録)」『先史琉球の生業と交易2』木下尚子(編) pp.67-73. 熊本大学文学部:熊本市
- 黒住耐二 2011 「琉球先史時代人とサンゴ礁資源-貝類を中心に」『先史・原史時代の琉球列島〜ヒトと景観』高宮広土・伊藤慎二(編) pp.87-107. 六一書房:東京
- 佐藤洋一郎 1992 『稲の来た道』裳華房:東京
- 佐々木高明 2003 『南からの日本文化』NHK ブックス:東京
- 高宮広土 1996 「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡』那覇市教育委員会(編) pp.83-100. 那覇市教育委員会:那覇市
- 高宮広土 1999 「栽培植物の探索」『前原遺跡』宜野座村教育委員会(編) pp.259-277. 宜野座村教育委員会:宜野座村
- 高宮広土 2002 「植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり」『先史琉球の生業と交易』木下尚子(編) pp.35-46. 熊本大学文学部:熊本市
- 高宮広土 2006 「南島中部圏における植物食利用の復元の意義」『先史琉球の生業と交易2』木下尚子(編) pp.89-100. 熊本大学文学部:熊本市
- 高宮広土 2006 「住吉貝塚出土の植物遺体」『住吉貝塚』知名町教育委員会(編) pp.100-107. 知名町教育委員会:知名町
- 高宮広土 2006 「植物遺体」『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター(編) pp.278-294. 沖縄県立埋蔵文化財センター:西原町
- 高宮広土 2007 「南島中部圏における農耕のはじまり」『日本考古学会2007年度熊本大会研究資料集』日本考古学会2007年熊本大会実行委員会(編) pp.420-431. 日本考古学協会2007年実行委員会:熊本市 2010
- 多和田真淳 1975 「沖縄先史原史時代の主食材料について」『南島考古』4: 25-28
- 辻誠一郎 1999 「前原遺跡の放射性炭素年代」『前原遺跡』宜野座村教育委員会(編) pp.278-280. 宜野座村教育委員会:宜野座村
- 辻誠一郎 2007 「層序と年代1 低湿地区」『伊礼原遺跡』北谷町教育委員会(編) pp.37-43. 北谷町教育委員会:北谷町
- 辻誠一郎・大松しのぶ・辻圭子 2007 「伊礼原遺跡の植物遺体群」『伊礼原遺跡』北谷町教委委員会(編) pp.433-444. 北谷町教育委員会:北谷町
- 初島住彦 1971 『琉球植物誌』沖縄生物教育研究会:那覇市
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2006 「新城下原第二遺跡(II 地区下層)の自然化学分析」『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター(編) pp.311-328. 沖縄県立埋蔵文化財センター:西原町
- 松村暲 1983 『琉球荻堂貝塚(復刻日本考古学文献集成)』第一書房:東京
- 柳田國男 1961 『海上の道』筑摩書房:東京
- 渡辺誠 1991 「喜友名東原ヌバタキ遺跡出土の植物遺体」『ヌバタキ』宜野湾市教育委員会(編) pp.114-121. 宜野湾市教育委員会:宜野湾市
- Pearson, Richard 1981 Environments of Kume and Iriomote, with Reference to Prehistoric Settlement. in *Subsistence and Settlement in Okinawa Prehistory-Kume and Iriomote*, ed. by Richard Pearson, pp.8-19. University of British Columbia: Vancouver.